

日刊 勤労千葉

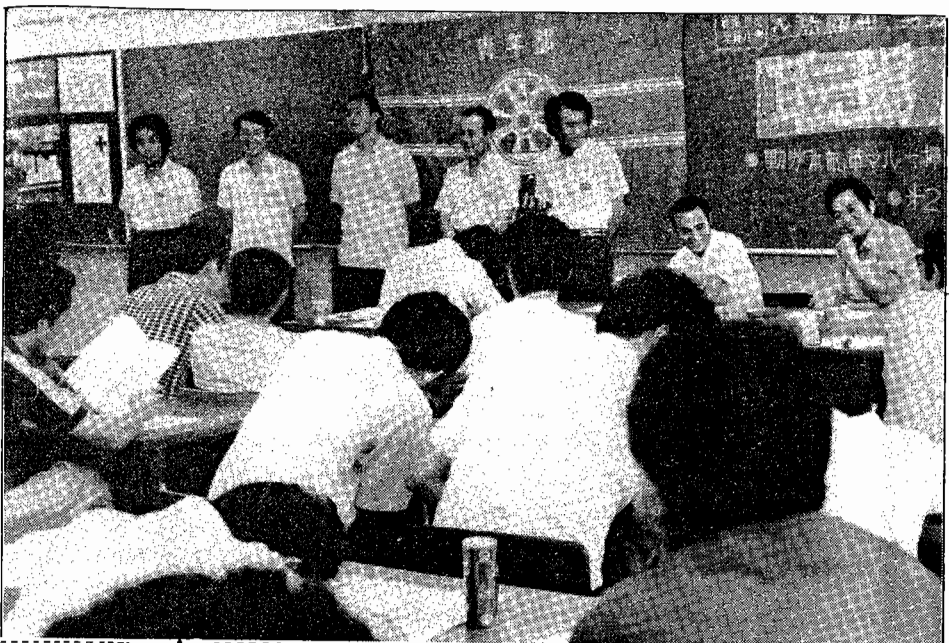
81.8.7
No815

国鉄千葉動力車労働組合
千葉市要町二一八(動力車会館)
(鉄電)二九三五・六(公衆)四五七二・七二〇七

獄中闘争勝利を糧に、勤労「本部」 革マル一掃へ (津田沼支部 執行委員長) 片岡一博

合流し、それぞれの決意をあらためて確認し合った。特に反弾圧闘争の勝利への不動の確信を得たのは、勾留理由開示公判の場で多くの仲間の顔を見た時であり、逆に心からこみあげる闘志が湧きあがる。私個人の闘いではなく、全ての仲間の闘いである確信を持てた。

独房へ、その鉄の重々しいとびらの閉じる音、完全に世の中としゃ断される音に聞えた。



津田沼支部で力強い闘争を誓う仲間たち(左より5人、津田沼支部長片岡一博、津田沼支部副支部長佐藤正一、津田沼支部書記佐藤正一、津田沼支部書記佐藤正一、津田沼支部書記佐藤正一)

連日連夜の取調に完黙で対抗

認識番号、二一四九番、接見禁止。十七日、この日からが本当の闘いであつた。連日、朝・昼・夜の食事時間以外はすべて、取り調べという権力との対決、「声を出さない」「口をきかない」ということがこれ程苦しく、苛酷な事だとは正直いつて想像外であつた。二四時間がこれ程長く感じたのもこの時だ。正直いつて一日一日、仲間とのきずなを切られて行く感じであつた。そして権力は完黙をくすすためによりわべだけの「人間関係」を築くのに必死となる。

身体の心配・家族の心配・仲間の悪口・組織の悪口、そして更に唯一接触できる権力以外にたよるものがないようにさせていく。高くそして厚い壁の外へ出られるのは、毎日接触している権力にたよる以外に出られないという孤立感を増大させんとありとあらゆる手口をつかってくる。そんな時、獄壁の外からその壁の厚さをぶち抜く、一心同体の仲間の声が聞える。外の闘いが手に取るように心に響く。権力の顔をして声を、嶋田・斎藤吉司に置き替える。「よしやるぞ」と闘志が全身を走る。勾留十日目、わずかだが確実に勝利の確信が生まれる。逆に権力のあせりが冷静に読みとれる。

三里塚・ジェット闘争貫徹ノ「国鉄35万人体制」粉碎ノ

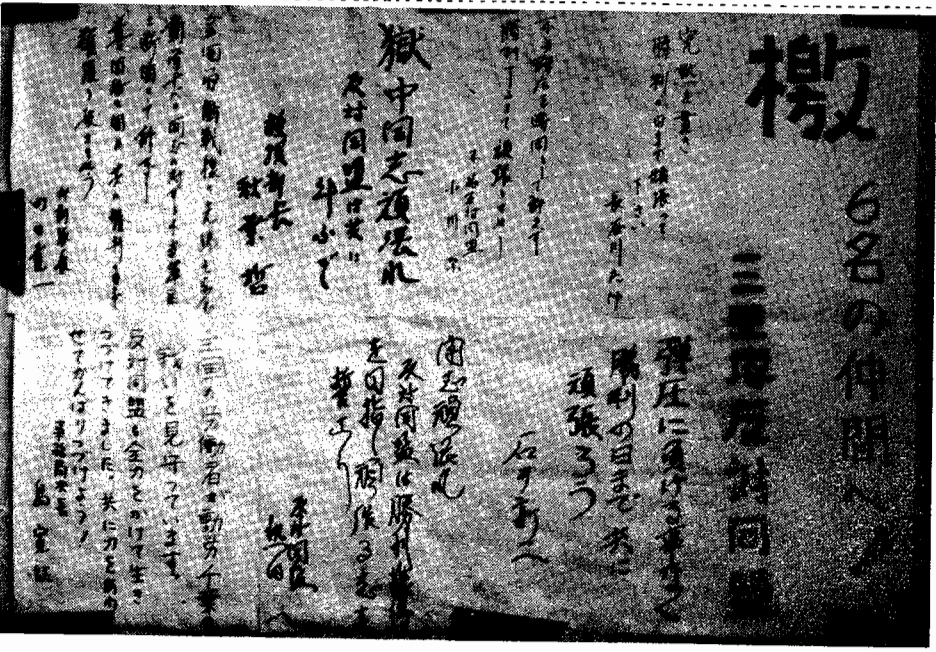
80年代勝利への試練

この間のとりわけ三月ジェット決戦の歴史的闘いを頂点とした、組織闘争闘戦の勝利への前進の渦中、激動する八〇年代への闘いの高揚突入期にかげられた、この、権力と勤労「本部」革マル一体となつた攻撃こそ我が組織に対する破壊攻撃以外の何ものでもないのであり、逆に一度は乗り越えなければならぬ試練でもある。いかなる重圧もこの一点にかけて、勤労千葉一三〇〇組合員仲間の魂にかけて、闘いにみずからが突入した。

船橋警察署から千葉中央署に移され、高い窓と鉄格子の中で四八時間を闘い抜き、裁判所・検察庁一体となつた十日間の勾留延長という不当勾留決定により、千葉刑務所へ留置された。このとき他の五名の仲間と

敵の焦りに我々の勝利を見た

デッチ上げにそつた自供の強要と転向をせまってくる。不当にも勾留されている五名の仲間との分断。「すべてお前の責任だ!」お前が責



全組合員・家族の強固な団結で組織破壊攻撃を粉碎せよ!